

京都市帝國大學經濟學會 經濟論叢

第三十一卷 第五號

昭和五年十一月一日發行

論叢

遊興税の若干問題 法學博士 神戸 正雄
 日本の家族制度と民法 文學博士 三浦 周行

說苑

勢力と經濟 文學博士 高田 保馬
 徳川時代の工業と商業資本 經濟學士 菅野和太郎
 米の卸賣相場と小賣相場との關係 經濟學士 谷口 吉彦
 世界商品價格の決定 經濟學博士 作田 莊一
 獨逸舊税制の崩壊と財政調整法 經濟學士 中川與之助
 歸屬理論の一考察 經濟學士 柴田 敬

雜錄

元祿時代歸農武士の家計 經濟學博士 黒正 巖
 統計拾穗抄 法學博士 財部 靜治
 正司考祺の專賣反對論 經濟學士 堀江 保藏

附錄

新着外國經濟雜誌主要論題

(禁轉載)

米の卸賣相場と小賣相場との關係

谷口吉彦

目次

- 一 玄米卸賣市場
- 二 玄米卸賣相場
- 三 値鞘の問題
- 四 變動の様態
- 五 三變動の異同
- 六 相關關係
- 七 結論

玄米卸賣市場

玄米卸賣市場即ち正米市場は、嚴密な意味においては、京都市には存在しない。たゞ併し、一定の地域に多數の正米商が互に接近して、店舗を構へ取引をなすといふ意味における市場はある。京都市内の六倉庫は、何れもその構内に特別の設備をなして、無償または低廉に、正米商の店舗をこゝに開かしてゐる。それ故におのゝの倉庫を中心として、それゝ小範圍の正米市場が、そこに成立してゐると見ることが出来る。現在における是等の倉庫およびその構内にある正米商の數を示せば次の如くである。

- (一) 附屬倉庫 三、
- (二) 千本倉庫 四、
- (三) 共同倉庫 三、
- (四) 岡田倉庫 三、
- (五) 中央倉庫 四、
- (六) 京都倉庫 三、

右の中、最初の四倉庫は、二條驛を中心とするものであり、後の二倉庫は、梅小路驛および丹波口驛を中心とするものである。従つて第二のより廣い正米市場を求むるならば、前の四倉庫に

屬するものを包括して、『三條市場』または『北の市場』となし、後の二倉庫に屬するものを包括して、『七條市場』または『南の市場』といふことが出来る。この二つの廣義の市場が、京都市における正米市場を構成する。この外には、倉庫の構内に店舗を有せずして、附近の市内に散在する正米商、および京都取引所の取引員を兼ねる正米商がある。これらを合して、以上三種の正米商は、現在約四十名に近く、その大部分は『京都正米團』なる任意組合を組織して、京都米穀商同業組合中の一團を成してゐる。昭和五年八月末現在の正米團員は三十五名を計へる。

これらの正米商は、一定の時、一定の場所に集合するものにあらず、また相互の間における横の取引は、原則として行はれず、従つて嚴密なる意味の正米市場ではない。正米商は各自に、産地問屋および小賣商と相對取引をなすのであるから、それはたゞ漠然と、賣買取引の行はるゝところを指す所の廣義の市場であるに過ぎない。かくの如きは、市場政策論としては、勿論問題であるに相違はないが、こゝでは姑らく之を別問題とする。

二 玄米卸賣相場

玄米の卸賣相場即ち正米相場は、市場の状態がかくの如くであるから、嚴密な意味における單一市場価格は、これまた求められない。たゞ正米商が各自に小賣商と相對取引する價格、またはそれらの集成を卸賣相場となし得るに止まる。従つて卸賣相場は、正米商を異にするに従つて、相違あるを免れない。いま正米商A B 二店について、最近一ヶ月間の相場を示せば、次の如く互

に相違するのを發見する。

第一表 正米相場の比較¹⁾ (玄米一石、圓單位、昭和五年七月中)

月日	正米商	山城米	丹波米	丹後米
七月一日	B A 店店	元〇・九	元二・三	元七・三
七月三日	B A 店店	元二・九	元三・三	元七・三
七月四日	B A 店店	元一・〇	元三・三	元七・三
七月八日	B A 店店	元二・一	元三・四	元七・四
七月九日	B A 店店	元二・三	元三・六	元七・六
七月十一日	B A 店店	元二・五	元三・八	元七・八
七月十二日	B A 店店	元一・五	元三・八	元七・八
七月十五日	B A 店店	元一・六	元三・九	元七・九
七月十六日	B A 店店	元三・六	元四・九	元七・九
七月十七日	B A 店店	元四・六	元五・九	元七・九
七月十八日	B A 店店	元五・七	元六・〇	元八・〇
七月十九日	B A 店店	元六・七	元七・〇	元八・〇
七月二十日	B A 店店	元八・七	元九・〇	元九・〇
七月廿一日	B A 店店	元〇・八	元一・一	元一・一
七月廿二日	B A 店店	元〇・九	元一・二	元一・二
七月廿三日	B A 店店	元一・〇	元一・三	元一・三
七月廿四日	B A 店店	元一・一	元一・四	元一・四
七月廿五日	B A 店店	元一・二	元一・五	元一・五
七月廿六日	B A 店店	元一・三	元一・六	元一・六
七月廿七日	B A 店店	元一・四	元一・七	元一・七
七月廿八日	B A 店店	元一・五	元一・八	元一・八
七月廿九日	B A 店店	元一・六	元一・九	元一・九
七月三十日	B A 店店	元一・七	元二・〇	元二・〇
七月卅一日	B A 店店	元一・八	元二・一	元二・一

A店は三條市場の某正米商
B店は七條市場の某正米商

さきに白米小賣相場が、市内の小賣店を異にするに従つて、相違あることを指摘したが、²⁾ 是の場合にも述べたる如く、等しく内地一等白米といふも、小賣商によつて各々その内容を異

1) 京都府穀物検査所の調査による。
2) 拙稿『京都市における米の小賣相場について』(經濟論叢XXXI, 3, p. 90-91.)

にするから、小賣相場の相違は嚴密に之を論じ得ない性質のものであつたが、いま正米相場の場合は之と異り銘柄および等級は同一である。従つて相場の相違は、文字通りの相違であり、或る店は高く、他の店は安きことを示すものである。たゞ併しこの場合にも、それは必ずしも、或る店が高利をむさぼり、他の店は低利に甘んずることを意味しない。何となれば、正米仕入の時期および方法の相違は正米商の仕入原價をして、各々相違あらしむるからである。従つて正米商の私經濟的立場から見れば、かゝる相場の相違は、理由あること、も考へらるゝが、併し市民の公經濟から見て、それが合理的であるかどうかは、勿論問題である。

有力なる小賣商にして、現金仕入をなしうるものは、自ら正米商を歴訪して現物と價格とを引合せ、最も有利な仕入をなしうる筈である。けれども此の如き小賣商は今日極めて稀であり、大多數のものは前述の正米市場に出入しない。反對に正米商から店員を派して、小賣商を歴訪せしめ、その註文をとり集めるのが最も普通に行はるゝ方法である。この場合に小賣商は、多數の注文取りを自由に迎へて、その間に完全な競争を行はしめるならば、公正なる玄米仕入をなしうる筈であるが、多くの小賣商におけるが如く、掛買仕入をなす場合には、必然に正米商との間に得意關係を生じて、慣習取引に墮することが少くない。たゞ正米相場の變動は頻繁にして日々に發表され、且つ期米相場の變動ともより深き關聯を有するから、何れの小賣商といへども、消費者ほどには無關心でありえない。或程度の競争は正米商の間に行はれ、従つて相場の相違も或程度に限定さるゝこと、前表によつて知らるゝところである。

正米相場は、(一)産地出廻の状況、(二)當地需要の状況、(三)期米相場の變動を斟酌し、正米仕入原價にもとづいて、正米商各自に決定するところである。仕入には『着で買ふ』^{チヤク}場合と、『乗で買ふ』^{ノリ}場合とあり、最近では殆んど大部分は、『着で買ふ』ことゝなつたといふ。戦前までは大體において、正米商より産地に買出しにゆく傾向強く、従つて『乗で買ふ』ことゝなつたが、戦後ことに最近には、産地より賣出しにゆく傾向強く、従つて『着で買ふ』ことが多くなる。この場合には、運賃その他の諸掛りはすべて産地持ちとなり、正米商は着驛原價に水上げ料(一俵五錢)と口錢を加へる。口錢即ち正米商の利潤は、時により物によつて相違あるは勿論であるが、大體において一%内外を標準とするものゝ様である、この價格を基準とし前記の三條件を斟酌して、その相場を決定し變更する。

相場の變動甚だしき時は、一日中と雖も正米相場は屢々變動する。例へば午前八時半、取引所の寄付相場を見たる後、第一回の相場を決定して、注文取りを派出し、午後一時半の後場の寄付を見て第二回の相場を決定し、午後三時の止相場を見て第三回の決定をする。この間といへども事情に激變あるときは随時に變更される。かくして時々刻々に變動しつゝあるのみならず、相對賣買の性質上、多少の掛引がその間に行はれるから、相手方の異なるに従つて、また多少の相違あるを保し難い。従つて嚴密な意味の正米相場は、今日のところ之を知り難い状態にある。こゝでは比較的に現實に近い信頼しうる資料によるの外ない。

註 京都市の正米相場として利用しうる資料は二つある。一は京都商工會議所による調査、二は京都府穀物検査所におけ

る調査である。前者は附屬倉庫内の一正米商および米穀商同業組合より日々の正米相場をまとめて報告せしめ、各別の月平均を二者平均せるものである。最近には銘柄を増して、山城赤三等、丹波赤三等、丹後赤三等、兩備赤三級をも加へ、これらを上中下の三級に分ちて平均し、『京都經濟時報』（『京都の實業』改稱）に發表されつゝあるが、比較的永續性を有する資料としてこゝに利用しえたのは、近江蒲生青三等の一銘柄よりない。

京都府穀物検査所の調査は、同じく附屬倉庫の二店と京都倉庫の二店とより、日々の相場を徴し、各別の月平均を二者平均せるものである。山城米、丹波米、丹後米の各赤三等をとつてゐるが、こゝでは山城米赤三等を利用した。

三 値鞘の問題

(一) 卸賣相場と小賣相場との値鞘は、小賣利得を形成するものであり、常に存在せねばならぬ。これなき時は、小賣商はたゞに小賣利潤を得られざるのみならず、種々の小賣經費を償ふこと能はず、また少くとも五%以上に及ぶ搗べりを損せねばならぬ¹⁾。實際において、兩者の値鞘がこの五%を割るが如きは、極めて稀なる一時的例外である。いま大正十年以來の毎月央における山城赤三等との値鞘を見るに、五%を割つてゐるのは、公設小賣相場において九回、市内小賣相場において四回にすぎない。この場合といへども、その銘柄等級をおとし、または混米をなすことによつて、この値鞘を事實上に高めうることは、考へられる。

けれどもこの商品の實質低下も、一定の程度以上になしうるものでない。そこで卸賣相場の騰貴したゝめ利鞘が一定の程度以下に下る時は、小賣價格を引上げて、小賣の利鞘を増さねばならぬ。また卸賣相場の下落したゝめに、値鞘が一定の程度以上に上る時は、小賣相場を引下げて、利鞘の縮少を計らねばならぬ。然らばこの小賣の利鞘は、いかなる限度に達したとき、小賣相場

1) 拙稿前掲參照（經濟論叢 XXXI, 3, p. 98—99.）

の變動によつて訂正されるものであらうか？ 換言せば値鞘の最大限度および最小限度は、どこにあるか、之を見るために、小賣相場の引上げおよび引下げの行はれた直前、直後の値鞘をば、公設小賣相場と蒲生青三相場について算出すれば次の如くなる。

第二表 値鞘の限度（蒲生青三等正米相場に對する公設市場一等白米の値鞘）

自昭和三年三月至昭和五年六月		小賣相場變動前後の値鞘 (%)
小賣相場	小賣相場	
引下げ直前	引上げ直前	
16.3—13.8	*10.4—12.8	
15.1—12.7	3.5— 5.8	
14.6—12.2	7.5— 9.8	
*5.3— 4.2	4.7— 3.6	
*5.1— 3.6	2.1— 2.3	
*3.9— 1.8	3.9— 5.9	
12.8—10.4	*14.1—19.2	
17.5—15.8	8.4—10.6	
16.7—14.1	*12.3—14.7	
15.8—13.2	*10.9—13.2	
13.6—11.3	*10.3—12.9	
15.5—13.1	6.9—10.9	
13.9—12.3	8.5—11.0	
14.1—11.9		
15.9—14.8		
15.9— 7.2		
15.5—13.2		
13.4—10.9 *(15.2—12.6)	8.0—10.0 *(5.7—7.5)	平均

*例外と認むべき場合、即ち右欄においては、値鞘がすでに高率なるに尙ほ引上げ、左欄においては、値鞘がすでに極めて低率なるに、尙ほ引下げたる場合である。前者は何れも六月乃至八月の端境期におこり、後者は何れも十二月の出廻期におこる興味ある現象である。括弧内の平均は、これらを控除せるものである。

之によりて見る時は、小賣相場が引下げられるのは、値鞘が最高一七、五%、平均一三、四%、(例外を控除せば一五、二%)に達した場合であり、之を小賣利鞘の最大限度と見ることが出来る。反對に小賣相場が引上げられるのは、最低二、一%、平均八、〇% (例外を除けば五、七%)に値鞘の減退せる場合であり、これを利鞘の最小限度と見做すことが出来る。何れの場合でも、小賣相

場の引上げまたは引下げによつて、その目的を達し、値鞘は二%乃至三%の増減を來たしてゐる。たゞ唯一の例外として、小賣を引上げたるに拘らず値鞘の却つて減少したのは、同時により以上の卸賣の騰貴を見たからである。

(二) 値鞘はこの十年間の一般的趨勢として、いかなる傾向をとつてゐるか、後に掲ぐる第二圖表によつて、之を看取することも出来るが、いま毎月央値鞘の年平均を表示せば、左の如くなる。

(卸賣相場は山城赤三等、小賣相場は何れも一等白米)

第三表 卸賣相場を一〇〇とする小賣相場

	大正十年	大正十一年	大正十二年	大正十三年	大正十四年	大正十五年	昭和二年	昭和三年	昭和四年	昭和五年(前)	昭和五年(算術平均)	標準係數	變化係數
公設小賣相場	110.0	111.3	107.7	107.4	107.5	107.3	107.8	107.7	107.6	107.5	107.0	1.0	1.36
市内小賣相場	118.0	119.3	113.5	116.3	115.6	116.3	110.6	108.3	107.5	110.4	114.3	1.1	1.34

之によれば公設小賣相場においては極めて微弱なる漸落傾向を、市内小賣相場においてはやゝ著しい漸落傾向を認められる。たゞ後者は主として昭和二年以後の低下によるものであり、それはむしろ小賣一等白米の銘柄實質の低下に歸せらるべきことは、標準小賣相場との比較によつて知りえらるゝ所であるから、この値鞘の低下は必ずしもそれだけの實質的低下を意味するものではない。それ故に、一般に小賣の利鞘は、この十年間に何等著しい趨勢變動を示してゐない。上昇傾向は全く認められず、下降傾向も比較的に輕微であるといふことが出来る。

2) 前掲拙稿參照 (經濟論叢前掲號 P. 106—)

(三) 小賣の種類を異にするに従つて、その利鞘の状態に相違あることは、同じく前表によつて認められる。第一に、公設小賣相場の利鞘が市内小賣相場のそれよりも一般に低いのは、後者が殆んど常に前者よりも高値にある事實と照應するものである。³⁾ 第二に、公設小賣利鞘の變動少きに反し、市内小賣利鞘の變動性に富むことは、前表の標準偏倚および變化係數を對照して、明らかに認められる。

(四) 米價の循環變動に従つて、小賣の利鞘は如何に變動するか？いま昭和四年の卸賣相場（山城赤三等）を一〇〇とする指數を作り、卸賣相場を一〇〇とする小賣相場の同じ指數と對照する時は、次の如き計數を得る。

第四表 卸賣米價指數と小賣利鞘指數との比較

米價指數	利鞘指數		
	公設	市内	
101.3	101.3	110.8	大正十年
111.7	101.3	111.9	大正十一年
101.5	100.7	112.1	大正十二年
117.0	99.8	109.3	大正十三年
113.4	99.9	108.5	大正十四年
115.8	103.7	109.1	大正十五年
117.4	100.1	108.8	昭和二年
99.7	101.5	101.7	昭和三年
100.0	100.0	100.0	昭和四年
99.5	101.1	101.7	昭和五年前半年
111.0	101.1	104.4	算術平均
112.1	101.1	101.1	標準偏倚
111.1	101.1	101.1	變化係數

是に由れば標準偏倚と變化係數において、米價指數と利鞘指數とは、著しい對照をなしてゐる。即ち米價の年々の變動は大なるに拘らず、利鞘の年々の變動は比較的に小さい。このことは即ち年々の大變動においては、小賣相場もまた卸賣相場には接近して變動し、その間の値鞘をして

3) 前掲拙稿參照（經濟論叢前掲號 P. 106—）

大差なからしむることを證するものであつて、後に變動の様態について論ずるところと照應するものである。

(五) 年々に繰り返される米價の季節變動において、値鞘は如何に變動するか？後に掲ぐる第一第二圖表によつて見らるゝ如く、こゝでは特に興味ある事實を發見する。米價上れば値鞘は減じ米價下れば値鞘は増大して、兩者はほゞ逆の相關々係を示す。これは次に述ぶる所の卸小賣兩相場の變動の様態における相違からくる結果であつて、第一に卸賣相場の變動ある毎に小賣相場の變動するが如きは殆んどないから、卸賣相場が上れば、それだけ値鞘は縮少され、下ればそれだけ値鞘が擴大されるからである。第二に小賣相場の共に變動する場合でも、その程度と時期において常に卸賣相場に及ばないから、それだけの範圍では、依然として逆の關係が現はれて來る。第一圖表において利鞘歩合と卸賣相場とは、ことに著しく對稱的に動いてゐるのを看取できる。

四 變動の様態

米の卸賣相場と小賣相場との變動様態を比較するときには、多くの興味ある事實を發見する。

(一) 變動の時間的頻度において、兩者は甚だしく異なる。卸賣相場は前述の如く、一日三回またはそれ以上の變動をなすことも少くない。こゝに利用しうる資料は、毎日中央の卸賣相場を示すに過ぎず、従つてそれは最少の變動を示すものにすぎないが、これと小賣相場の變動を對比したゞけでも、著しい相違を示してゐる。このことは後に掲ぐる第一圖表によつて、最も明らかに看取

されるが、いま昭和四年中における變動の回数を見るに、小賣相場の十三回に對し、卸賣相場は實に八十六回の多きに達してゐる。従つて同一相場の持續日數は、卸賣相場において遙かに短い。左にその状態を表示する。

第五表 同一相場の持續日數の比較

小賣相場	持續日數		卸賣相場	持續日數	
	歩合	回数		歩合	回数
			三六、〇	三	一日
	七、七	一	二一、六	二	二日
	一五、四	二	五、八	五	三日
			一四、〇	三	四日
	七、七	一	五、八	五	五日
	七、七	一	八、二	七	六日
			四、七	四	七日
	七、七	一	二、三	二	八日
			三、四	三	九日
	五、八	七	八、二	七	十日以上
	100、〇	三	100、〇	六	計

この事實は即ち第一の意味における小賣相場の安定性と、卸賣相場の變動性を實證するものである。

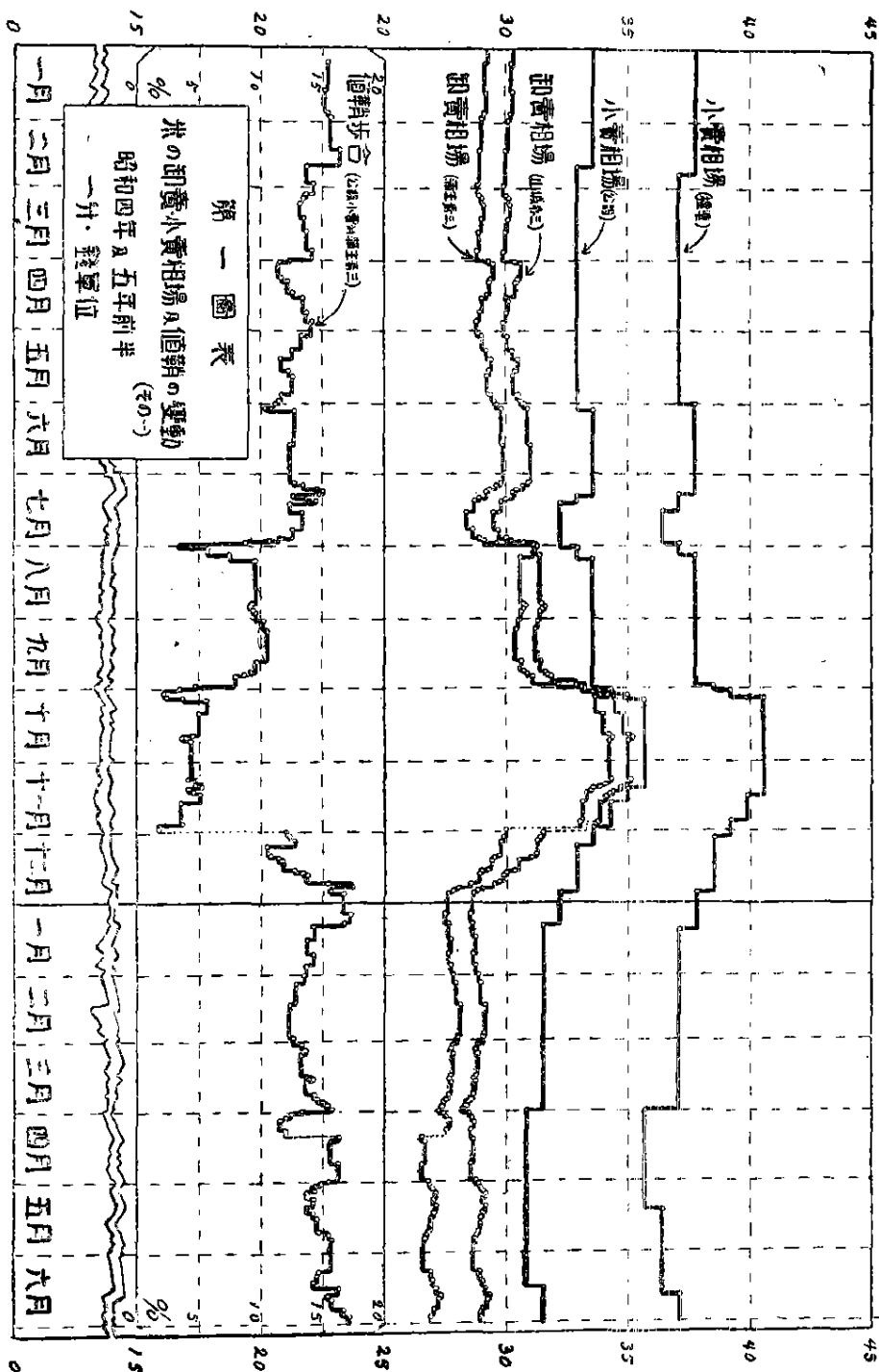
- (二) 一回の變動の大きさを比較するに、小賣においては、多くの場合に、變動の單位は一疋につき五厘(一石につき約七十錢)である。然らざる場合には、この二倍程度の上下をすることも稀にある。之に反して卸賣相場にあつては、變動の單位は一石につき十錢(一疋につき約〇、七一厘)であり、一時に數單位の動きをなすこともあるが、一般的には一石十錢づきの動きを最多とする。
- (三) 以上二つの事實を總括して次の如く言ふことができる。卸賣相場は多數の小變動を頻繁に

繰り返すに反し、小賣相場は少數の大變動を時々、繰り返すものである。更に詳しく言へば、頻繁な卸賣相場の小變動が、一定の方向にその變動をつゞけても、それが一定の程度に達せざる中に自らその方向を訂正する限りは、小賣相場の變動を惹きおこさず、同一相場を持続する。こゝに小賣相場の安定性と卸賣相場の變動性が生ずる。然るに卸賣相場の變動が、一定の程度を超えて、一定の方向に變動をつゞくる時は、小賣相場は遂に之に追隨せざるを得なくなつて、その變動を惹きおこすこととなる。そこで問題は、いかなる程度に卸賣相場の變動する場合、小賣相場は之に追隨せぬばならぬか、卸賣相場の變動が、いかなる程度に止まる間は、小賣相場はその變動を必要としないか、その程度如何の問題である。これは結局するところ値鞘の限度の問題に歸する。即ち卸賣相場の騰貴したゝめに、小賣の利鞘が或る程度以上に縮少さるゝ時は、小賣はその價格を引上げて利鞘を回復せねばならず、また卸賣相場の下落したゝめに、利鞘が或る程度以上に増大する時は、小賣相場を引下げて利鞘を縮少せねばならぬからである。小賣利鞘がいかなる最大限度において引下げられ、いかなる最小限度において引上げられるかは、既に實證しえた所である。これらの關係は、第一圖表をよむことによつても明らかにされるであらう。

五 三 變動の異同

(一) 季節變動　米價の季節變動そのもの、研究は、他の機會にゆづることゝし、こゝではたゞ年々に繰返さるゝ變動の様態が、卸賣と小賣において如何に相違するかを見んとするものである。

第一圖表 卸賣相場、小賣相場および値納の變動その一¹⁾ (昭和四年一月以後の毎變動、一升錢單位)



第一圖表
米の卸賣小賣相場及値納の變動
昭和四年一月至半年
一升・錢單位

1) 卸賣相場山城赤三等は、前記の京都府穀物検査所の調査による附屬倉庫内A店(第一表)の相場であり、商工會議所の調査と一致する。蒲生青三等は、商工會議所の調査による同一店の相場である。
昭和四年十二月より新米相場、五年四月十五日より従來同業組合検査なりし蒲生青三等は、滋賀縣縣營検査に移され、品位低下のため一石一圓方低落した。
値納歩合とは $100 \times \frac{\text{小賣相場}}{\text{卸賣相場}} - 100$ である。

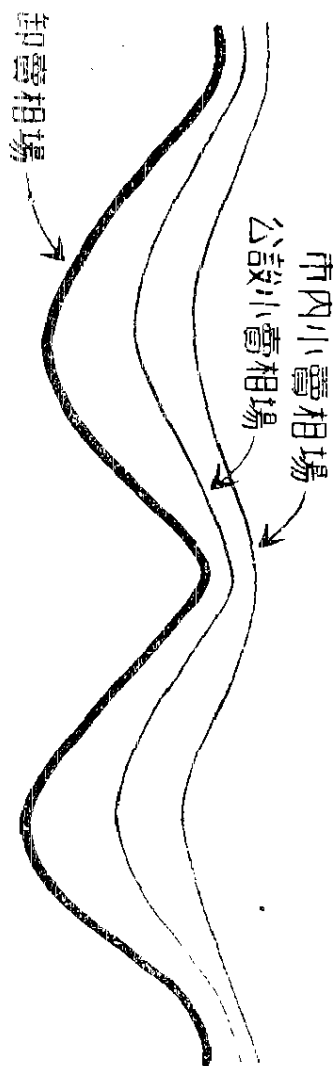
そのために先づ、卸賣相場、公設小賣相場、市内小賣相場の各々に、十二ヶ月の移動平均を施して季節變動を除去したる循環變動値（趨勢變動値を含む）を求め、これと現實數との偏倚を比較することゝした。この計算の結果によれば、各々の標準偏倚は次の如くである。

	卸賣相場	公設小賣相場	市内小賣相場
σ	2.04	1.99	1.98
%	100.0	97.5	97.1

昭和四年中をとつて計算すれば、より著しき對照を示してゐる。

	卸賣相場	公設小賣相場	市内小賣相場
σ	1.71	1.19	1.11
%	100.0	68.1	64.9

このことは即ち年内の變動において、小賣相場の標準的振幅は、卸賣相場のそれよりも、より小なることを示す。詳言すれば、小賣は卸賣の騰貴と同じ程度に上りえず、またその下落と同じ程度に下落しえざること、即ち第二の意味における小賣相場の安定性が發見される。この事實あるが故に、前述の値鞘の相反性が出てくる。即ち小賣は年内の變動において、卸賣に完全に追隨しえざるが故に、それだけの程度において卸賣が上れば利鞘は下り、卸賣が下れば利鞘は上るといふ逆の相關々係を示すことゝなる。而して季節變動の山においても、小賣相場は勿論卸賣相場の上位にあるべきものであるから、この變動状態を典型的に示せば、次の圖の如く、山においては收斂し、谷においては放散する傾向が認められる。



の趨勢値からの移動平均値の偏倚を比較することとした。三者の標準偏倚は各々次の如くなる。

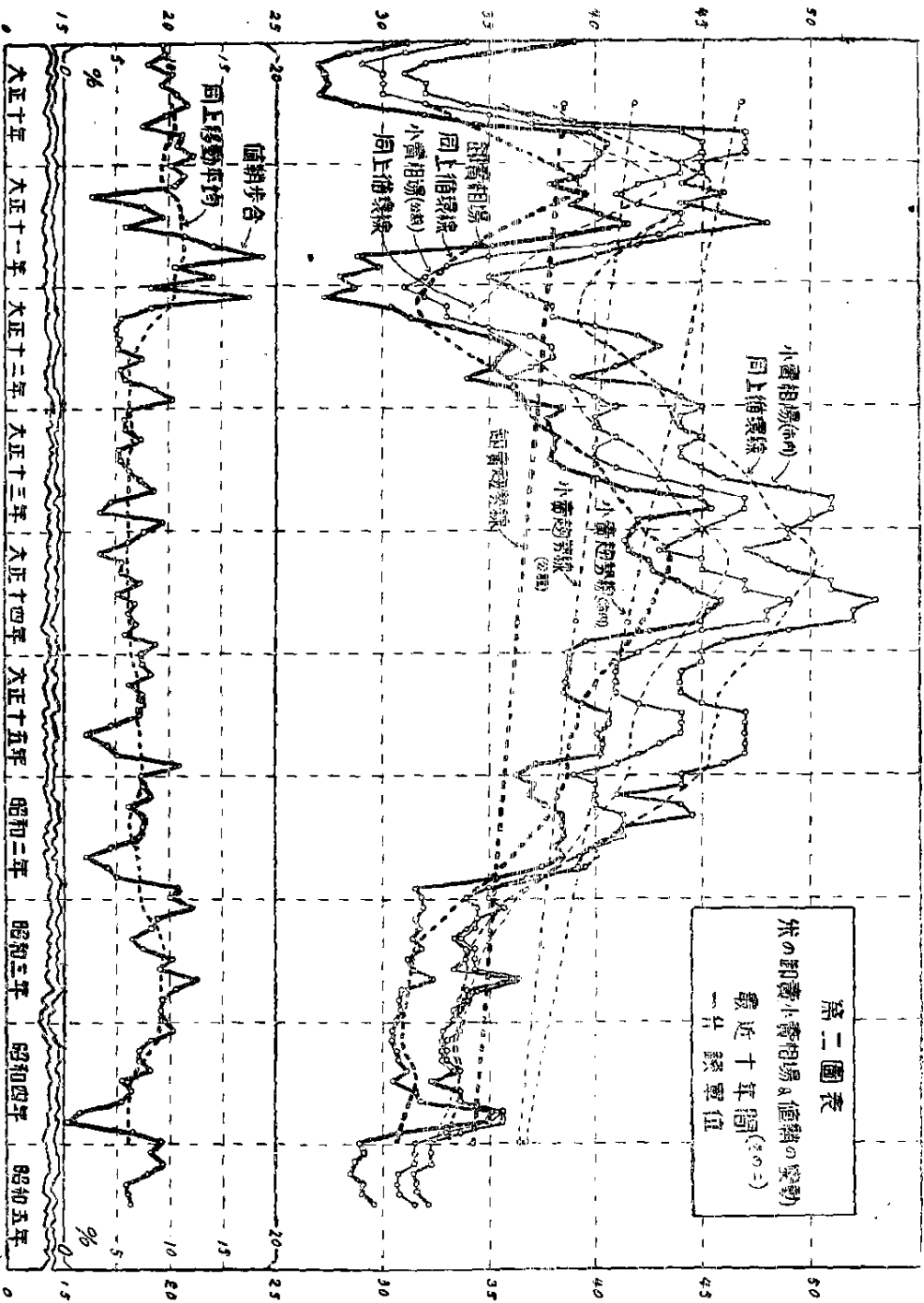
	卸賣相場	公設小賣相場	市内小賣相場
σ	3.77	3.74	4.55
%	100.0	99.2	120.7

是に由れば、市内小賣相場だけは、著しく大なる標準的振幅を示してゐる。けれどもこれは寧ろ既に述べたる如く、昭和二年以後の銘柄實質の低下に負ふものと考へられる。之を斟酌するとき、公設小賣相場に示さるゝが如く、卸賣と小賣との間には、大なる相違なきものゝ様である。何れにせよ循環變動においては、小賣相場の安定性は、之を明らかに認めることは出来ない状態にある。

(三)趨勢變動 最近十年間の趨勢において、卸賣相場と小賣相場との間に、何等かの相違を發見しうるか？第二圖表によつて明らかなる如く、第一に、この十年間に微弱な漸落傾向をとつてゐる點において三者は一致する。第二に、その漸落率もまた三者の間に著しい相違を見ない。市内小

(二)循環變動 卸小賣兩相場の循環變動を比較するため、十二ヶ月の移動平均値に最小自乗法による直線をあてはめて、各々の趨勢値を求め、こ

第二圖表 卸賣相場小賣相場および値鞘の變動その二 (毎月平均、一升錢單位)



1) 卸賣相場は山城赤三等をとり、穀物検査所の調査によるAB二店(第一表)の各別月平均の平均をとる。値鞘歩合は前圖表同様の算出方法による。

賣相場のやゝ著しい漸落傾向を示してゐるのは、前述の事情を考慮せねばならぬ。いま直線方程式 $y = a + bx$ における a および b の値を比較すれば左の如くである。

	卸賣相場	公設小賣相場	市内小賣相場
$a =$	36.3	39.1	41.5.....(原點(總平均))
$b =$	-0.0428	-0.0333	-0.0945.....(勾配(月平均下落))

六. 相 關 係

(一) 卸賣相場と小賣相場との間に、著しき順の相關々係の存することは、前掲二つの圖表によつて明らかに認められる。いまその相關係數を知るために、Persons 教授に倣つて、標準偏倚に對する各偏倚の偏倚歩合を相乗して算出する方法を試みた。第六表は卸賣相場に關するその計數である。(二つの小賣相場に關する計數は、紙面の都合により省略する)。

第六表 卸賣相場と小賣相場との相關係數

	大正十年					大正十一年					大正十二年				
	卸賣相場	移動平均	偏倚	標準偏倚	小賣同相乘	卸賣相場	移動平均	偏倚	標準偏倚	小賣同相乘	卸賣相場	移動平均	偏倚	標準偏倚	小賣同相乘
一月	三、一〇					三九、六三	三八、一八	十〇、八八	十〇、九八		二六、五九	三三、一一	一三、五二	一七、七二	十三、八九
二月	二六、三五					三九、四八	三八、九〇	十〇、六六	十〇、二〇		二七、一九	三一、七一	一四、五二	一三、二二	十三、三四
三月	二六、八七					三七、九〇	三九、二一	一三、一〇	一〇、六四	十〇、三八	三〇、四三	三一、六一	一三、一〇	一〇、五九	十〇、五〇
四月	二七、三三					三九、四四	三八、八〇	一〇、七七	十〇、四一	一〇、三二	三一、二六	三一、八一	一〇、五一	一〇、五二	十〇、二〇

1) W. M. Persons; Indises of General Business Conditions (1919) p. 123.

	昭和二年										昭和三年										昭和四年									
	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十
大正十三年	三六、八〇	三七、七四	三七、七五	三八、一三	三七、九五	三七、九二	三八、五三	四〇、一三	四一、三九	四四、八九	四一、九〇	四一、五三	四一、二一	四〇、八〇	四〇、四一	四〇、〇二	三九、六三	三九、二四	三八、八五	三八、四六	三九、〇七	三九、六八	四〇、二九	四〇、九〇	四一、五一	四一、一二	四一、七三	四二、三四	四二、八五	四三、四六
大正十四年	三六、八〇	三七、七四	三七、七五	三八、一三	三七、九五	三七、九二	三八、五三	四〇、一三	四一、三九	四四、八九	四一、九〇	四一、五三	四一、二一	四〇、八〇	四〇、四一	四〇、〇二	三九、六三	三九、二四	三八、八五	三八、四六	三九、〇七	三九、六八	四〇、二九	四〇、九〇	四一、五一	四一、一二	四一、七三	四二、三四	四二、八五	四三、四六
大正十五年	三六、八〇	三七、七四	三七、七五	三八、一三	三七、九五	三七、九二	三八、五三	四〇、一三	四一、三九	四四、八九	四一、九〇	四一、五三	四一、二一	四〇、八〇	四〇、四一	四〇、〇二	三九、六三	三九、二四	三八、八五	三八、四六	三九、〇七	三九、六八	四〇、二九	四〇、九〇	四一、五一	四一、一二	四一、七三	四二、三四	四二、八五	四三、四六

係を計算したる結果は、 $r = 0.896$ を示して、これまた大なる順の相關々係を實證してゐる。

(二)前後關係 卸賣相場の變動と小賣相場のそれとは、何れが先行し、何れが後續して動くか、『時の遅れ』を算出するには、前述の相關係數の算出を、前後に一ヶ月づゝ、すまして計算する方法がある。けれどもこの方法は、こゝでは資料の性質上、十分に適當でない。何となれば、卸賣相場の數字は、日々に變動せる相場の月平均であり、小賣相場のそれは月央における現實の相場である。この場合に前者もまた月央相場を表すものと看做して、前項の如く同月の相關々係を見ることは差支ないが、而も前者は少くとも一ヶ月に數回、後者は時として數ヶ月に一回の變動あるに過ぎず、且つ一ヶ月といふ比較的長い期間を單位として、前後にすらすり外に方法がないからである。それ故にこの場合には、むしろ第一圖表の如き變動の時期を示せる圖表について、その前後關係を點檢するのが、より適當の方法と思はれる。いま第一圖表の示す限りについて言ふ時は、卸賣相場が先づ一定の方向に變動したる後、小賣相場が之に追隨する。更に分ちて言へば、(一)上昇の場合には、卸賣相場が一定の期間、一定の程度に上昇したる後、まづ標準小賣相場の上昇を見、更におくられて公設小賣相場の追隨となる。(二)下降の場合にも、卸賣相場が一定の期間、一定の程度に下降したる後、まづ公設小賣相場の下降となり、最後に標準小賣相場の下落となる。²⁾(三)小賣相場の追隨は、下降の場合よりも、上昇の場合においてより速かである。たゞ試みに、一ヶ月づゝ、前後にすらしたる場合の相關係數を算出するならば、左の如き結果を示して、同月において係數は最も大きく、且つ卸賣相場の先行がうかゞはれる。(小賣相場として公設

2) 前掲拙稿參照 (經濟論叢前掲號 P. 109)

小賣相場をさる。）

卸賣相場を一ヶ月づゝ後らせた係數……………0.688

同月の相關係數……………0.906

卸賣相場を一ヶ月づゝ進ませた係數……………0.538
……………0.147

たゞ併し以上の統計的結果から、兩者の因果關係または依存關係は、決定されうるものでない。³⁾ これらの結果はたゞ、前論の諸關係を消極的に實證しうるものたるに止まる。

(三) 値鞘の逆關係 變動様態における卸小賣兩相場の相違から、小賣の利鞘は、米價の季節變動と逆の相關々係に立つことは、前掲の二つの圖表から既に指摘した所である。いま試みにこの相關係數を算出すれば次の如くなる。

卸賣相場(山城赤三等)と小賣値鞘(公設)との同月の相關係數…………… $r = -0.467$

この係數は即ち、かなりの程度に逆の相關々係のあることを示してゐる。

七 結 論

以上卸賣相場と小賣相場の異同および關係について實證しえたところを要約する。

第一に、最近十年間に微弱な漸落趨勢を示し、

第二に、最初の五年間に漸騰し、次の五年間に漸落して、ほゞ一回の循環をなしてゐる。この趨勢變動と循環變動においては、卸賣相場と小賣相場との間に甚しき相違を認められない。即ち

3) 前掲拙稿參照 (經濟論叢前掲號 P. 110)

この二つの變動の意味においては、小賣相場の安定性も、卸賣相場の變動性も、之を明らかに認めることは出来ない。

第三に、年々に繰り返される季節變動においては、卸賣は小賣に比し、より大なる變動をなし得てゐる。

第四に、日々の現實の相場においては、卸賣は小刻みにではあるが極めて頻繁に變動するに反し、小賣は大刻みにではあるが極めて時々に変動する。これら二つの意味においてのみ、小賣相場の安定性と卸賣相場の變動性が明らかに認められる。

かくの如き變動様態の相違の結果として、卸賣と小賣の値鞘もまた、前述の第一、第二に照應して、趨勢的および循環的には、殆んど著しき變動を示さず、また前述の第三、第四に照應して値鞘は米價の騰落と逆の相關々係にたつ。即ち米價が季節的にまた日々騰貴する場合には、値鞘は低下し、米價が下落する場合には、値鞘は増大の傾向を示すこととなる。

最後に、かくの如き異同あるに拘らず、現實には、卸賣相場は小賣相場に對して、直接に絶對的影響を與へ、小賣相場を變動せしむる最も有力な原因となりつゝある。これが消極的實證をなす事實として、兩者の相關々係と前後關係をあげることが出来る。(完)

附記 京都府穀物検査所、正米商大島辨三郎氏、京都商工會議所等の示されたる厚意に對し、深く感謝の意を表す。